第一部 死への緒論

第一章 アンチ・ランガージュ

第一節 孤独な幼児としての状態性

胎児段階と幼児段階の違いについて。胎児段階は未だ、母親を目撃していない。しかし、幼児段階は母親を確信した遍歴を持つ。通俗的には、ここに他者の起源があるだとかいうのであろうが、まあそれはそういうことだろう。胎児段階は、しかし私は事実の源泉が何処か知らぬまま語ろうとするが、万能と永遠に自乗されてゆく余熱とを感じ合わせ、この万能なファルス的感触から離反されていない。これは、自己の起源でさえある。よりむしろ、自己は予てから前胎児段階から据えてあった、メシア（勇敢な救世主、魂の三原色）なのであった。私は、形象群の外部に存在しうる形象或いは形象群が、魂の三原色（ここでの“三”原色はその数量を考えず、概念的内奥のみを期待するものである）に属しうるのは妥当であると信ずるわけだ。ゆえに、二律背反のシェーマ（仮に **wS** とする）はジャック・デリダ的に構築するなれば、**wS** に或る相反する２つの述語を置くだろう（**wS-T wS-aT**）。このとき、**wS-T | wS-aT** がその恣意的本質上、互いの「優劣関係」のうちにあるのだと主張する（**&wS-T | %wS-aT :**但し**“&”**は優で、**“%”**は劣とする）。よって**&wS-T | %wS-aT** や**%S-T | &wS-aT** となろうが、**&wS-& | %wS-%**ともなり得るわけで、これが形象形容の被形象化の全貌なのだが、といってもこれは一つの例に過ぎない。そうさ、これが言いたかった。我がラカン師匠を模倣して書いたわけではない、記号的論理は演算なしには効用が少ない。たとい、私の理論に位相的なマニケー（位相狂気）が姿を現そうとも、それは既にメシアに封印されているという説を推そう。というのも、精神構造論においては **wS** の決定不可能性が顕著に、それこそ前顕揚（ゆえに、連想や推論の要素還元的幾何、条理）が理論こそ矛盾しない形で矛盾自体を示すようなムーブメントがみられた。**wS-T > wS-aT, wS-aT > wS-T**（**<,>**は一方を「含む」）という現象は極めて不可思議である。実際、一方を「含意する」という表現は正当なようである。そんなところで、上述の被形象化を函数 **h(x)**で書くことにしよう。**wS-T > wS-aT** は一般的な形式なので、この部分シェーマから**h(>)**を抽出する（含意の方向は任意）。これが即ち条理（前顕揚）と考えてよさそうである。これを適用する（ゆえにトートロジカリティ遡及性により、要素命題に還元し、還元するであろうこと）規定函数を改めて **p(x)**と書いて、基準を **A** と置き **p** 函数の近くに添えておこう（ゆえに例えば、**A:p(x)**など）。よりむしろ、**$$h(>):p(T)**或いは**$$h(>):p(wS-T)**が母親である（**$$**は反復）。この書法が明晰かはわからないが、巨大真理が他者に近き存在であることは、日常による補正法を利かせていれば造作もなく確かめられよう。言葉と言語を区別し、ここに言葉を記せば、それこそが**“**他者**”**なのであって卑猥である。言語はラカン的に言えば大他者なので、自己であって、或いは聖なるものに属する。幼児段階の決定的な心的特質は、まさに卑猥であるということである。なぜなれば、**$$h(>):p(T)**が母親（ほとんど大他者）だからである。ひいてはなぜなれば、巨大真理がメシアに属さんとする **h(wS-&)**或いは **h(wS-%)**としての、他者自体なので。さて、私に書かせるとはこういうことである。では、胎児段階は如何になっているか? 胎児を **foe**、幼児を **nou** と書けば、凡そ情緒論的な観点から **wS-foe | wS-nou** は二律背反になっている。よって、胎児は聖なる法悦状態になる。「ならば」、**$$h(>):p(wS-foe) = (wS-nou)**である。であれば、母親は最も普遍的形式として存在するので、**$$h(>):p(wS-T)**の**”T** 自体**”**は一般のマニケーである。それにより、如何なる体系においても等価関係の公理は満たすから**(mom) = (nou)**が成り立ち、容易に解釈されるのは**“**母親自体が幼児自体だ**“**という言明である。ここに、幼年時代の基礎原則がある。**$$p(h(wS-%)) = (mom) = (nou)**なる卑猥形式。これが通俗的に認められている、「幸

福」である。なるほど、怯えて生きることは歓喜ならざる。アランの幸福論などを望んで読めば、卑猥感幸福の温床であることに気づく。それゆえ、卑猥は生の現象にほかならない。私は前著で、メシアの顕揚（意識化）こそが即ち「生の終焉」、「死」なのだということを用いて、走馬灯的観念を概説した。それは巨大レゾン（根源真理）の示唆でもあった、この辺の史的記述はもはや知らぬ。魂の三原色としてのメシア自体が、死なのかもしれない。なぜなれば、自己や優といった観念は位相的狂気に凡そ合致するものと想われ、自己”感“を呈す、や優の観念”的 “などといった接尾辞を受容しえたのだが、死といえばそれ自体として力動的に、行為を促しているからである。これが生誕的なものと性愛的なものへの際限なき”欲望“する主体を可能にしており、これらは比較的同値である。だから、メシアが欲望を含意するか、或いは含意されるかして、しかしその本質的な行為原理（マニケーを色彩論的混淆に還元する動作）は失われずして、生き続ける。位相的な予測にすぎないが、亡霊的観念界（優の世界）と死自体の位置は、遍歴論的に対等。この二律背反は、%wS-vie | &wS-morと記述可能である（vieは生、morは死）。死が永遠の優越、ゆえに劣よりの前顕揚が自己や出生といった限りなき胎児的心的特質を提出する際には決まって、死への傾倒を覚えよう。死とはなにか、という猜疑に関しては”そもそも充分な宣言を与えることができない“ことは、魂の三原色の”定義（非恣意的）“からして自明の理である。生誕的な渇望は、人間にとって本質なのだろう。哀しみや憂いなどといったネガティヴな情緒を排斥すべきこと、これが幸福論的倫理学の基礎概念のひとつではなかったか。また、性愛的なものの振舞がどうも不可解である。もはや欲望の満足と欲望とを寸断して考えるべきなのではないか？まあ、凡そ力動的精神構造論（動的）への道がここに開かれていると考えられる。ひとつ、青春期（明らかな性愛の夜明け）を当事者的に分析する手立ても残っている。しかし、一旦手を引くことにしよう。
呼吸、五臓六腑の鼓動。まどろみの内にあっては、このような無意識的活用を意識化しようと試みている。胎児においても、生物である限りにおいて生理的活用を絶えず営むであろう。これは慣習化されたある種の「生理ハビトゥス」である。精神構造論は、心理的世界と行為的世界を一応区分しており、私がまず解析しているところは前者である。しかしながら、互いが接触する面が存在しなくてはならない。訥弁を語った時のように、発話は狂気（無意識、情緒にとっては意識）で、かつリズム、アクセントも狂気だ。言葉たる他者と言語たる自己、私はこう考える。行為は、ほとんど“無限に”制約された自由の化身、多数の生理ハビトゥスの化身と捉える。ゆえ、統辞論を生じさせる仕事は、死者を出し得る。ここに、改めて“レピュテ（既知）“への緒論がある。了解を離れれば、自体へゆく。幼児（胎児ではなかろう）言語発達論者たちは、普遍文法やら後天言語やらという遺伝学に気に入られるような考察ばかりしているが、彼らが曖昧に扱う「幼児の学習」といったところこそ本質なのではないか。幼児は、先ずもって言語を了解しない。だから、言語自体、音韻、リズム、形状という外的感触をつかもうとする。これがマティエール性、自体性なので「幼児期はもうない」というフロイトの言説は、成果への観察に過ぎないだろう。”常に既に”論法によると、我々は幼児期にいろいろな場所を見、いろいろな言語を聞いた。現代に住む言語話者の我々は、“つねにすでに“言語を習熟しており、それゆえに前言語的世界について考えることができない（想起することができない、了解できない、通底しえない、潜り込ませ逃してしまう）。或いは正しいかもしれぬ。それは前顕揚の全切除による認識が、最もピュアな知覚であろう、ということに等しい。それが或いは訥弁の原理である。訥弁と退化。いやしかし、そうとは限らぬ。人々は玉のような息子を愛で、もう二度と離れることはないというように、”見守る“。ないしは、原稿の校閲作業においては極めて”注意深く“読む。心配症が病気レヴェルなのか、そうでないのかを決定するのはもはや無意味に想われる。まあとにかく、人々はパラノイア性の状態になるたび、顕揚を欲望する。ゆえ、訥弁がマティエール自体をなかんずく重視するかは甚だ疑念を抱く問題だ。

第二節猛省すべき精神！

しみったれどもめ！愛を失った天文家はいずれ吝嗇家と化す！